



Title	須藤訓任教授 研究業績等一覧
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2021, 52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

須藤訓任教授 研究業績等一覧

著書

1. 『ハイデガー『存在と時間』第2篇評釈——本来性と時間性』, 岩波書店, 560p., 2020年5月
2. 『ニーチェの歴史思想——物語・発生史・系譜学』, 大阪大学出版会, 431p., 2011年12月
3. 『プラトンを学ぶ人のために』(共著), 世界思想社, 執筆箇所:「ソクラテス以前」と「プラトン以前」——ニーチェとプラトン, pp.228-235; プラトニズムの前夜に——デリダとプラトン, pp.251-257, 2014年7月
4. 岩波講座 哲学9『科学/技術の哲学』(共著), 岩波書店, 執筆部分:「真理への欲望——真理は規範たりうるか」, pp.107-131, 2008年9月
5. 哲学の歴史12『実存・構造・他者』(共著), 中央公論新社, 執筆部分:「フーコー」, pp.581-612, 2008年4月
6. 哲学の歴史9『反哲学と世紀末19-20世紀』(共著), 中央公論新社, 執筆部分:総論「マルクス・ニーチェ・フロイト」, pp.19-44; 「ニーチェ」, pp.263-376, 2007年8月
7. 子どもだって哲学②『自分で何だろう』(共著), 俊成出版, 執筆部分:「「わたし」って何だろう」, pp.161-200, 2007年7月
8. 『哲学は何を問うべきか』(共著), 担当論文:「美のかたち——身体性の観点から」, 晃洋書房, pp.225-244, 2005年10月
9. 『西洋哲学史観と時代区分』(共著), 担当論文:「学説と人格のあわい——「哲学史」の成立条件をもとめて」, 昭和堂, pp.265-311, 2004年10月
10. 『知の教科書 ヘーゲル』(共著), 担当論文:「ヘーゲルとニーチェ——歴史をめぐって」, 講談社, pp.102-116, 2004年3月
11. 『ニーチェ〈永劫回帰〉という迷宮』, 講談社, 266p., 1999年9月
12. 『新・哲学講義3, 知のパラドックス』(共著), 岩波書店, 担当論文:「屋根から瓦が……必然・意志・偶然」, pp.125-150, 1998年1月
13. 『形象と言語』(共著), 担当論文:「転移としての言語——初期ニーチェの場合」, 世界思想社, pp.193-240, 1997年9月
14. 岩波講座『現代思想』第14巻「近代/反近代」(共著), 岩波書店, 担当論文:「ミーメシスとロゴス——スピノザからの問題提起」, 岩波書店, pp.53-90, 1994年4月
15. 『プラクシスの現象学』(共著), 世界書院, 担当論文:「感情伝染」, pp.205-242; pp.298-301, 1993年7月
16. 『実践哲学の現在』(共著), 世界思想社, 担当論文:「破壊のかたち」, pp.1-184, 1992年1月
17. 『知の理論の現在』(共著), 世界思想社, 担当論文:「忘却と想起」, pp.204-223, 1987年4月
18. 新岩波講座『哲学』第4巻「世界と意味」(共著), 岩波書店, 担当論文:「意味と無意味——反復によるその生成と崩壊」, pp.125-158, 1985年10月

学術論文

1. 「二」の夢想——ハイデガーのトラークル論を脱構築するデリダと、デリダを再構築するケレルの余白に, 『メタフェシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座編), 50号, pp.1-21, 2019年12月
2. Existenz und Wissenschaft in Heideggers *Sein und Zeit*, Suto, Norihide, *Philosophia OSAKA* (Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University), 14号, pp.27-51, 2019年3月
3. 「解釈学的状況」の出生——『存在と時間』第二部の意図したもの——, 『メタフェシカ』(大

- 阪大学大学院文学研究科哲学講座編), 48号, pp.1-15, 2017年12月
4. Martin Heideggers *Sein und Zeit*, Suto, Norihide, *Philosophia OSAKA* (Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University), 12号, pp.71-94, 2017年3月
 5. 「共通性」について：ニーチェの遠近法主義のいま一つの可能性, 『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座編), 46号, pp.1-18, 2015年12月
 6. 未来への態度, 『哲學』, 第65号, pp.25-42, 2014年4月
 7. 「運命」について——スピノザ、ショーベンハウアー、ニーチェ——, 岩波『思想』, 1080号, pp.237-269, 2014年4月
 8. 思想の歪曲としての「力への意志」——エリーザベト・ニーチェの場合, 『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座編), 第43号, pp.1-22, 2012年12月
 9. 「正義」について——ニーチェとハイデガー, Heidegger-Forum, vol.6, pp.83-91, 2012年9月
 10. Ist Ordnung ohne Transzendenz möglich? Eric Voegelin und die Demokratie, Suto, Norihide, Voegelian Occasional Papers, 89卷, pp.7-31, 2012年8月
 11. 芸術と道徳としての身体——ニーチェの場合, 『西田哲学会年報』(西田哲学会), 8卷, pp.69-87, 2011年7月
 12. 諦念という戦略——アルトゥールとヨハナ, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』, 51卷, pp.1-48, 2011年3月
 13. 哲学者の搖籃——ショーベンハウアー母子の旅日記：1803-1804年, 『哲学論叢』(京都大学哲学論叢刊行会編), 37卷, pp.13-28, 2010年11月
 14. 苦悶の洗惚——アデーレ・ショーベンハウナー「アリッチャの麗人」をめぐって, 『ショーベンハウナー研究』(日本ショーベンハウナー協会), 15卷, pp.3-31, 2010年6月
 15. 憑依としての哲学, 『KAWADE 道の手帳 ニーチェ入門』, 河出書房新社, pp.17-24, 2010年6月
 16. Die Bedeutung der Denkkonomie beim späten Nietzsche, Suto, Norihide, *Philosophia OSAKA* (Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University), 5号, pp.89-98, 2010年3月
 17. ニーチェの「正義」論再考——「力への意志」の尺度をめぐって, 『理想』, 理想社, 684卷, pp.2-15, 2010年2月
 18. ダイモニオンの警告——ニーチェとその父, 『待兼山論叢』(大阪大学文学研究科) 哲学篇, 43号, pp.1-17, 2009年12月
 19. Caesar nullus nobis haec otia fecit. ショーベンハウナーとその父, 『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座編), 38号, pp.25-46, 2007年12月
 20. 「異界」とのつきあい方 アデーレとアルトゥール, 『岐路に立つ人文学』1, pp.119-147, 2007年1月
 21. Erlebnis und Gedanke der ewigen Wiederkehr des Gleichen bei Nietzsche, Suto, Norihide, *Philosophia OSAKA* (Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University), No.1, pp.23-31, 2006年3月
 22. 「習俗の倫理」について——ニーチェの「遠近法主義」の前景と背景——, 『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座編), 第36号, pp.1-13, 2005年12月
 23. 人間において最善なるところ, 『アルケー』(関西哲学会), 13号, pp.30-45, 2005年6月
 24. 「現実的」であるとは何を意味するか——スピノザの「自己」, 岩波『思想』, 950号, pp.83-108, 2003年6月
 25. 「歴史精神」とは何か——ニーチェとマッハ, 『人間存在論』2003, 第9号, pp.213-228, 2003年3月
 26. 同時代の「根源」へ——ニーチェ『ワーグナーの場合』を読む, 『哲学論集』(大谷大学哲学科), 第47号, 総31p., 2001年3月

27. 認識者の系譜学——「時代」という名の自己, 岩波『思想』, 919号, pp.73-96, 2000年12月
28. 対立の転轍——ユートピアン＝ローティ, 岩波『思想』, 910号, pp.25-45, 2000年3月
29. 「語り」の諸相——蓮如雜感, 『蓮如の世界』(文栄堂), pp.715-736, 1998年4月
30. 超越なき秩序は可能か——E・フェーゲリンと民主主義, 『人間存在論』, 第3号, pp.221-233, 1997年3月
31. ニーチェの「経済」思想——アヴェナリウスマッハによる「あとからの影響」, 『大谷大学研究年報』(大谷大学), 第48集, pp.61-132, 1996年3月
32. 「よきヨーロッパ人」とは誰か——ニーチェからの時代展望, 『理想』, 理想社, 第651号, pp.70-83, 1993年6月
33. ニーチェ——永劫回帰, 『現代哲学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.34-47, 1992年12月
34. ニーチェの脱ユートピア—自然と科学—, 『ユスティティア』, 第3号, pp.86-107, 1992年2月
35. ニーチェの自然, 『大谷学報』(大谷大学), 第70卷第2号, pp.1-15, 1991年2月
36. 世界肯定と時間の様相——ニーチェの永劫回帰思想をめぐって, 『大谷大学研究年報』(大谷大学), 第41集, pp.89-151, 1989年2月
37. 「琥珀のなかの虫」——ニーチェ中期のユートピア, 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』, 第7号, pp.51-73, 1989年2月
38. 「いったい誰が解釈するのか」, 『理想』, 理想社, 第638号, pp.79-90, 1988年4月
39. 言語と反省——クロソウスキー『ディアナの水浴』より, 『大谷学報』(大谷大学), 第66卷第1号, pp.50-64, 1986年6月
40. ニーチェのプラトン——アポロのヴェールの影で, 『哲学論集』(大谷大学哲学科), 32号, pp.42-61, 1986年3月
41. 「私の父としてはすでに死んでおり, わたしの母としては生き続け...」——現代フランスにおけるニーチェ, 『理想』, 理想社, 第615号, pp.250-265, 1984年8月
42. 観想から自律へ——批判期前カントの人間観, 『哲学論叢』(京都大学哲学論叢刊行会編), 第10集, pp.19-28, 1983年9月
43. 権力意志と意志の否定——ニーチェの戦略的矛盾, 『倫理学年報』(日本倫理学会), 第32集, pp.113-128, 1983年3月
44. ニヒリズムの自己超克——意味の（無）意味性の顕現として, 『理想』, 理想社, 第583号, pp.84-100, 1981年12月